ヴィオロンのため息の

—高原のDデイ—

Les sanglots longs
Des violons
De l'automne

五十嵐 均

角川書店

五十嵐均（いがらし ひとし）

ヴィオロンのため息の

―高原のDデイ―

角川書店

ヴィオロンのため息の―高原のDデイ―
平成六年五月二十五日初版発行
平成六年六月二十五日三版発行

著　者――五十嵐　均
発行者――角川歴彦
発行所――株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二―一三―三
〒102　振替東京三―一九五二〇八
電話／営業部〇三―三八一七―八五二一
編集部〇三―三八一七―八四五一
印刷所――旭印刷株式会社
製本所――株式会社宮田製本所

落丁・乱丁本はご面倒でも小社角川ブック・サービス宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。
©Printed in Japan　ISBN4-04-872805-9　C0093

ヴィオロンのため息の
——高原のDデイ——

目次

プロローグ　五
第一章　ル・オムレツ・パリ・ソワール　一四
第二章　孤独な叛乱　七三
第三章　ノルマンディの嵐　一一三
第四章　ヴィオロンのため息の　一五三
第五章　半世紀の恋　二二三
第六章　離山　二七九
エピローグ　三一八
あとがき　三三二
選評　三三五
横溝正史賞受賞作リスト　三三一

主な登場人物

伏見（久世）敦子（18→68）　軽井沢に疎開している大使の娘　のち法相夫人
ハンス・ツヴァイク（25→75）　ドイツ大使館付武官　少佐　情報将校である
ビクトル・グレチコ（38）　ソ連大使館参事官　じつはGRU大佐
伏見莞二（50）　前駐和蘭大使　敦子の父　リベラル派の外交官で待命中
八重（43）　その妻
よしや（26→76）　伏見家生えぬきの使用人　敦子の親代りである
金田明男（30）　軽井沢署刑事　下積みに甘んずる捜査ひと筋の朝鮮人
みさ（25→75）　その日本人妻
ジェーン・リード（23→73）　敦子の親友　軽井沢聖霊教会の牧師の娘
ヘルマン・ジーヴェルト　ドイツ大使館参事官　スパイ業務を統轄するハンスの上司
アレクセイ・スヴォーロフ　ソ連大使館一等書記官　ソ連側スパイ活動の責任者
風間耕作　金田の遺児　戦後彼もまた軽井沢署刑事となった

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ヴィオロンのため息の——高原のDデイ——

装幀／毛利　彰

プロローグ

風が出てきたようだ。たっぷり朝露を吸って重くなった窓の外のからまつが、飛沫をとばしながらざわめいた。

六月の軽井沢は霧の季節である。冬と夏とに二度来る華やかなシーズンの狭間で、湿気を含んだ梅雨どきの高原の大気が、じっとりと澱んでいる。人の往来もめっきり少なくなって、保養地の街は物憂い静寂に包まれる。

久世敦子は、旧軽で歴史を誇るオリエンタルホテルの、プルニエ・レストラン『ノルマンディ』にいた。客にアペリチフや食後のコーヒーを供するレストランのサロンに、朝から座りこんでいるのだ。現職の法務大臣・久世務の夫人の時ならぬ来訪は、ホテルの副支配人を兼ねるこの店のマネージャーを尠なからず驚かせた。ノルマンディのオープンは十一時半というのに、いまはまだ午前十時なのだ。

「すみませんけど、隅のほうに居させてね」
単身やって来た夫人に、日頃人を従えつけている威厳を込めて言われると、マネージャーは一も二もなく、彼女をいちばん見晴らしの良いソファーに招じ入れたのだった。
現在は夫の姓の『久世』を名乗っているが、夫人は元駐和蘭大使・伏見莞二の娘だった。伏見家の別荘は、戦前すでに、オリエンタルホテルの玄関から、ほんの一、二分の場所にあり、したがって彼女は、当のマネージャーが生まれるもっと以前から、このホテルの上客であった。
十一時を廻っても誰も現れないので、マネージャーは窓外に視線を投げている彼女に、背後から恭しく尋ねてみた。そうするのが礼儀だと判断したのだ。
「奥様、いつもありがとうございます。本日はお待ち合わせでございますか」
日本人の年配女性には珍しい大柄な夫人は、まっすぐな背中をさらに伸ばして肩越しに彼を振り向くと、微笑みながらどこか曖昧な口調で答えた。
「ええ、まあ。……古い約束なんですけど」
「さようでございますか。どんなお方様かお教えいただければ、久世様がこちらにいらっしゃるとご案内できますが……」
マネージャーの気遣いに、夫人は軽く右手を振ってその申し出を斥けた。
「ありがとう。でもノルマンディで会うとはっきり決めてあるから、大丈夫よ」
夫人の前から退ってきたマネージャーは、彼女のいつまでも若い肌と、日本人ばなれした高貴な鼻梁に、一種の感銘を受けていた。
――久世夫人は今年幾つになるのだろう？
戦後彼をオリエンタルホテルに入社させた先輩の話では、伏見家の令嬢だった彼女は、戦前、女

学生のころからホテルのテニスコートの常連だったそうだ。その計算では、一九四〇年頃ティーンエージャーだから、九四年の今は六十代の終りということになる。

——どう見ても、五十代にしか見えない。

最近、自身の老いを身に沁みて感じている彼は、軽くため息をついた。

大正末期に建って七十年の歴史をもつオリエンタルホテルは、平成になってから二度めの改築を行った後も、なお創業時のコロニアル風の面影を保持している。構造こそ三階建てのコンクリート造りになったが、設計思想はイギリス人が作った木造建築物の時代のままで、とくにエントランスホールやメインロビーなど公室部分は、よく注意しなければ耐火構造とわからぬ程、木質が強調されている。

プルニエ・レストラン、ノルマンディは、コンシアージュ前の吹抜階段を昇った二階にある。ここもその例に洩れず、横長の樫材を張って磨き込んだ床や、木彫りの手摺をもつ白塗りのヴェランダなど、太平洋戦争中の風雲に耐え、戦後もほとんどそのまま建て替えられた『古き良き時代』の様式を、忠実に踏襲している。

久世敦子は、いつもこの場所に来るたびに感じる、目眩に似た感覚に襲われていた。一挙に数十年の時を遡った、昭和十九年（一九四四年）から二十年頃にかけての、このホテルの風景は、今のすこしカラフルになったたたずまいを、モノクロに変えるだけで充分だった。それ程昔は、何も変ることなく保存されていた。

六月六日の待合わせが、古い約束だと言ったのを、あのマネージャーはどう受け取ったろうかと、敦子の胸にほろ苦い可笑しさがこみあげていた。

——古い約束……

そう、それはちょうど半世紀前の誓いだった。今を遡る五十年の昔、当時まだ伏見敦子であった十八歳の彼女は、ドイツ陸軍少佐ハンス・ツヴァイクと、また逢う日のことを誓ったのだった。

「……こんなに愛しあっている私達が、もう生涯逢えないなんて、いくら何でもむご過ぎます」

魂を絞り出すように叫んだ敦子の訴えに対して、ハンスが言ったことを、彼女は今も憶えている。

「そう、時が経てばどんな罪でも赦される日が来るだろう。すっかり時代が変って、ぼく達がしたことの意味を、歴史の眼で眺められるようになるまで、ふたりは逢わないほうがいい」

「その時はいつくるの?」

敦子の問いかけに、ハンスは、苦渋に満ちた表情で、こんな答えをしたのだった。

「ぼく達の人生が終る日のすこし前、今から半世紀経って、ふたりが別々の道を歩み終ったあとならば、神様も許してくださると思う。一九九四年六月六日に、ぼく達がもしまだ生きていたら、きっとこの場所で逢いましょう」

それに対して敦子は、こう言ったように思う。

「たとえ遥か先のことでも、いつか貴方のお顔を見る日が来るという望みが、あたしの人生を支えてくれると思います」

何といういちずな情熱だったろうと、自分でも思う。それにしても、六十八歳になった今なお、その願いを抱き続けている自分に、敦子は驚嘆する思いだった。

怖ろしい秘密を共有するハンス・ツヴァイクと再会を果せば、きっとよくないことが起ると、敦子の理性は警鐘を鳴らしていた。平和な時代になって、ヨーロッパ旅行がごく普通のことになっても、敦子がハンスを訪ねて行かなかったのは、大人の分別がぎりぎりのところで、彼女を踏み止まらせていたからに他ならない。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

――ハンスは来るだろうか？

五十年の歳月を隔てて、彼が一万キロ彼方の欧州から、若気の約束を果しにやって来ると想像することが、現実離れしているのだと、一方で囁く声がした。しかしまた一方では、彼は必ず来ると、キリストの再臨を信じる修道女のように、頑なに信じている部分があった。

午後一時を廻って、昼食の客が席を立ち始めると、先刻のマネージャーがまた、おそるおそるという姿勢で、伺いを立てに来た。

「お連れ様、お見えになりませんですね」

マネージャーはまるで自分が申し訳なさそうに、首を垂れた。

「ええ、おじゃまでしょうけど、このまま待たせていただきますわ」

敦子はつとめて元気に言った。

「じゃまなど、とんでもございません、いつまででもどうぞ。ただ、昼のラストオーダーの時刻ですので、何か召し上がっておかれてはいかがかと……」

「そうね……」

空腹を感じる気持の余裕はなかったが、朝も食べないで出てきていた。

「ドーバー・ソールのムニエルでもいただきましょうか」

ここも営業しているのだからと、記憶にあるこの店の看板料理を口に出した。

「かしこまりました。今日は河岸から、とくべつ良いものが入っておりますので」

マネージャーは、わが意を得たように微笑した。軽井沢の山中で、海鮮類を扱うブルニエ・レストランを称するからには、材料の品揃えにはとくに気負いがある。東京の市中に一歩もひけをとらない、新鮮な材料が常に用意されていた。

テーブルに移って、頼んだ料理を何とか腹に入れてしまうと、敦子はまた、サロンの午前中と同じソファーに戻った。そしてほとんど身じろぎもしない姿勢で、ハンスを待ちつづけた。

彼がやって来るのは、ドイツからとは限らないのだが、もしそうなら、フランクフルトやベルリンから飛来するフライトの成田到着は、十六時前後だった。彼の地で忙しく充実した日々を送っているハンスが、その日の夕刻やっと成田に着いて、一路軽井沢へ車をとばして来る——敦子はそんなイメージを、少女のように抱いていた。

原色のセーターを着込んだ若いカップルが、窓の下のコンコースへ赤いポルシェで乗りつけた。当然のことながら、五十年のあいだに軽井沢は変った。選ばれた人々の避暑地から、誰もが来られる、それも若者達が占領するリゾート地になったのだ。

「おお、今年もまたお会いできて素晴らしい、マダム」

陽気な呼び掛けでわれに返った。初老の白人夫妻が、若いカップルのように肩を組んで、笑い掛けていた。

「あら、コールダーさん。いつも仲がおよろしくて羨ましいですわ」

敦子はひとりでに唇にのぼってくる流暢な英語で、彼女の家から二軒隣の別荘の主へ、好意の籠ったひやかしを返した。アメリカ系の会計事務所経営者で、夏が近づくと東京から移ってくる一番手の外人である。

賑やかに一年ぶりの世間話をして二人が出て行くと、それを待っていたように、ダークスーツの日本人が近づいてきた。

「これは久世夫人、ごぶさたしてます。臼井です」

夫の務といっしょに自民党をおん出て新党に馳せ参じた参議院議員であった。夫の務と同期か一

期後輩の筈だった。
「あら、臼井先生。今日はまたゴルフでも？……」
敦子は物慣れた態度で、にこやかに応じた。
「いえ、違いますよ、それが研修。役人を集めてご進講ってやつを受けるんですよ。それはそうと、ご主人の大臣ご就任、おめでとうございます。むしろ遅い位でしたな」
そういえば臼井議員も、先般の組閣で、どこかの省の政務次官になった筈だ。
程よくあしらって臼井を去らせると、敦子は時計に眼をやって、ふっと肩を落とした。午前から午後、午後から夕刻と、六月六日という日の時刻が経過するにつれて、ハンス・ツヴァイクが懐かしい姿を見せる確率は減少していくのだ。二人には、明日というものが無い。もしハンスが、遥々ヨーロッパから地球を半周して訪れてくれるなら、わざわざ約束の六日を外すとは考えられないからだ。
今日敦子は、少々奇異に思われようとも、終日この席を動くつもりはなかった。敦子がホテル内外のどこへ移動しようと、ハンスにわからぬ筈はないのだが、決めてある場所を動くことで、彼女が生涯待ち続けた夢が逃げて行ってしまう気がした。旅路の終りに近づいた今、最後のチャンスがどうか微笑んでくれますようにと、心の中で祈りつづけた。
長い初夏の日にも、ようやく陰りがみえて、斜めにあけられた窓から夕方のひんやりした外気が入ってくると、レストランのチロル風のスタンドに灯が点されて、ノルマンディがいちばん混雑する時刻を迎えた。
案の定マネージャーが、彼女の夕食を聞きに来たが、空腹でないことを理由に、こんどは断わった。オリエンタルホテルから北東の方角に、ちょっと身を乗り出せば見える旧伏見別荘、つまりい

まの久世家の山荘には、管理人のばあやと、東京から敦子を運んできた運転手がいるが、遅くなるから自分のことはいっさい構わなくていいと、言い置いてきた。今日は月曜日で、夫の務は、東京の邸を離れることはない。

変貌を遂げた夏の軽井沢の夜は、華やいだ賑わいに包まれる。しかしディナータイムのざわめきが去って、九時半のオーダーストップの時刻が近づくと、陽気にさんざめいていたノルマンディの空気も冷えてくる。敦子の胸も、息苦しい想いにしめつけられはじめた。幸福を運んでくれる舞台の筈だったサロンの内装や調度が、重く敦子にのしかかってくる気がして、居たたまれない圧迫感に、彼女はヴェランダへ出た。夜露が落ちはじめた大気は、外灯の照明を受けて鈍く煙っていた。飽和点近くにまで湿気をはらんだ重い空気が、ひんやりと彼女を包んだ。

――ハンスあなたは来ないの？　私達はもう逢うことがないの？……

ほとんど声を出すようにして、敦子は暗闇に向って呼び掛けてみた。じっとそのまま、シャネルスーツの上にショールをまとった身体が冷え切ってしまうのも構わず、ほの暗い空間に佇みつづけた。

「あなたは、来ないの？」

今でも忘れていないドイツ語で、敦子はまた呼び掛けてみた。

「アッコ、ぼくはちゃんと戻ってきたよ」

中空の高みから、声が返ってきた気がした。空耳に腹をたてて、声のした方角を払った敦子の腕は、強い力でがっちりと支えられた。彼女の背後、サロンとヴェランダを仕切るガラス戸の前に、トレンチコートを羽織った黒い人影が立っていた。

はっとして、必死に眼を凝らした。敦子の記憶のなかのハンスは、頼もしげな骨格で、いつも上

向きに見るほど背が高かった。
「ああ、ハンス」
やや円くなった肩の感じが昔と違っているものの、忘れたことのないハンス・ツヴァイクの懐かしいシルエットが、幻をにわかに現実のものにした。相変らずのっぽで精悍な体軀のハンスが、暗くて表情はわからなかったが、大きな腕を拡げて敦子を抱き取ろうとしていた。

第一章　ル・オムレツ・パリ・ソワール

1

白ペンキの洋館の西向きの窓からは、今は野菜畑になってしまった庭越しに、オリエンタルホテルのヴェランダが望見された。窓辺にはスタインウェイの竪型ピアノが置かれていて、ドイツ陸軍士官の軍服姿をしたハンス・ツヴァイクが、早くて烈しい調子のピアノ曲に、何度も間違えながら取り組んでいた。

「だめだめ、そんな力任せでは。この曲は火のような情熱のなかに、不安と哀しみが込められているのよ」

そういって伏見敦子は、脇の円椅子から鍵盤に腕を伸ばして、左手上部からの下行運動の部分を、きれいに弾いてみせた。

「ハンスは左手で早く演奏する技術は、とってもいいわ。あとはもっと感情をこめること。激しいだけでは、乱暴に荒れ狂う嵐になり下ってしまいます」

「ハイ」

レッスンのとき、ハンスと敦子が交す会話は英語だが、彼は手ほどきを受け始めた日本語で、神

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com